北海道医報
ISSN 0913-0217　2012.2.1. 第1121号
発行人　北海道医師会長　長瀬　清
発行所　北海道医師会
〒060-8627 札幌市中央区大通西6丁目
TEL (011) 231-1432　FAX (011) 221-5070
URL http://www.hokkaido.med.or.jp/
E-mail info@office.hokkaido.med.or.jp　頒価 1部 250円

既得権はなぜ非難されるのか

―その功罪について―

情報広報部長　山科　賢児

既得権という言葉にはなぜか「悪」のイメージがあり、近年日本の政治経済の長期低迷の原因に既得権があるように言われる。大阪市長に当選した橋下徹氏は「既得権益を破壊する」という公約をかかげて当選した。しかし既得権、既得権益はどこにでもあり、存在そのものは否定されるべきものではない。

今の日本は夥しい数の規則、制度が社会の隅々まで張り巡らされ、社会には流動性がなくなり、様々な格差の拡大が顕著となっている。機能しなくなった構造・制度を「何とかしなければいけない」と誰もが気がついているのだが、暗礁に乗り上げた船と助けを求めている乗船員に対して有効な救出手段をなかなか講じれないのが現状である。

既得権は今でこそ非難されることもあるが、日本をこれまで発展させてきた原動力の一つであった。戦後の復興期、高度成長期には国をあげて既得権の獲得拡大に取り組み驚異的な経済成長を成し遂げた。当時人々は長時間労働、辛い仕事を苦ともせず家族や会社や社会のために働いた。なぜなら個人や組織にも自由な競争原理が働いて既得権の拡大が可能であり、既得権から得た利益を人々に還元できたからであろう。既得権を求めようと努力すればそれなりを獲得できる時代であり、そして既得権を享受し既得権(新たな利権)を追い求める人々の活力で日本は活気にあふれていた。それと共に電力、銀行などの権益を独占する巨大企業が誕生し、既得権を管轄する官僚制度も整備され、日本は発展の頂点を迎えたのである。戦後の経済成長過程は既得権の拡大とその死守の歴史とも言えるだろう。

このように既得権は社会が成長している時は肯定的にも受け止められる傾向にあり問題視されることはあまりない。だが一旦社会が成熟、安定し飽和状態となると、一転して既得権が社会の発展の「足かせ」や新たな成長の弊害になってしまう恐れがでてくる。権益を享受している既得権益層が変化に抵抗し、また認可という既得権を握る制度側も仕組みを変更しようとしないからである。そうなると既得権は活力のある既得権ではなくなってしまいかねない。

既得権を失うのは不安で怖い。既得権益が心地よいものであればなおさら必死に守らざるを得ない。誰も不利になるような変化を望まないし、不快なストレスを経験したくはないのは当然であるが、閉鎖的で排他的となった既得権は社会での勢いを失いその役割を終えなければならなくなる。本来の既得権とは流動的であり、時代、環境によって形を変えると考えるべきではないだろうか。既得権が既得権であるためには変化の流れを判断し、時には自ら既得権を開放し新たな権益を取り込んでいく意識が求められる。日本ではなぜか「出る杭は打たれる」傾向にあり、既得権に立ち向かう人々が既存の組織などの激しい抵抗に遭い、志半ばにして舞台から消えていくのを見る。能力のある人材や意欲的な組織が挑戦する機会や結果の出せる土壌が日本にないのは残念ではないだろうか。

日本の医療制度に目を向ければ医師の臨床活動の根幹である国民皆保険制度にTPP問題という巨大な外圧が立ちはだかっている。我々の医療制度は優れているが今や制度自体の矛盾、改革点が数多くあるのを直視しなければならない。医療の高度化、高額化が進む一方、高齢化、少子化が顕著となり、制度は沈没寸前の危機であり、制度の修復を試みているが、転覆回避の糸口はなかなか見えてこない。もし崩壊するようであれば医師の持つ既得権は大幅に変化することになるだろう。他にも医師の職務権限の移譲問題、医療機関への競争原理の導入、医療機関の営利目的化など我々の既得権の見直しを求める問題が山積している。

織田信長は油の既得権益を独占していたが、独占権に固執していては破綻すると判断して楽市楽座を設立し、市場開放によって巨額の富を得て天下統一の基礎を作った。その見事なバランス感覚には驚嘆する。組織の既得権が社会から認知され維持されるには既得権の内容が時代の要求に応じて変化し、また新たな既得権を求める者の主張が妥当であれば積極的に取り込んでしまうことであろう。さもなければ既存組織は時代から取り残され社会の信頼を失いかねない。社会にとって弊害となった既得権は開放し、社会に貢献できる新たな権益を求めなければ、組織の生き残りは難しいと感じる。それには自ら変わろうとする自覚と決断が必要であろう。既得権という既得既存のものにしがみつき、組織の衰退をただ眺めながら年月が過ぎ去るのは虚しくはないだろうか。